吉田松陰 その姿

横松和平太

花燃えず

昨年のNHK大河ドラマ「花燃ゆ」は不発に終ったようだ。2015年は今年の大河ドラマ「真田丸」の主人公真田父子の没後400年にあたっていた。本来ならば「真田丸の出番であったはずである。一方〝世界文化遺産〟に山口県の各所を登録しようという運動があり、その後押しのために大河ドラマの放映を待望する向きがあったという。結果的には「明治日本の産業革命遺産　製鉄・製鋼・造船・石炭産業」の構成資産としてユネスコの世界文化遺産に松陰神社や松下村塾なども登録され、その目的を達したかに見える。

しかし「花燃ゆ」は人気が上がらず視聴率的には苦戦し、最後には「真田丸」待望論さえ出たようだ。昔から小説・芝居・映画などの歴史物では戦国時代は人気があり、真田一族物も数多くヒットしてきた。

「花燃ゆ」の前半の主人公は、伊勢谷(いせや)友介演ずるところの**吉田松陰**であった。幕末から明治維新にかけての激動の時代を背景にした志士達が活躍する話は、今も人気のあるテーマである。しかし坂本龍馬や新撰組などが主人公の話に比べ、吉田松陰を主人公にした映画やドラマは数が少なく、ヒットしたものがない。司馬遼太郎の小説でも松陰が大きく登場するのは『世に棲む日日』くらいであろう。だが松陰が全体の主人公という訳ではなく、長州藩の志士群像たちが主役と言ってよい。

松陰という人物は、明治維新の中心となった多くの若者たちを育てた思想家・教育者として知られてきた割には今一つ人気が出ない、あるいはドラマになりにくい人物とも言えそうである。その人間像、キャラクターイメージが複雑なのかも知れない。

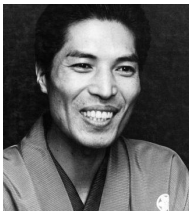
では、彼の実像は果たしてどうなのか？ そしてそのイメージがどう伝えられ、どう創られてきたのか、今に伝わる図像や銅像などから考えて見たい。

イメージギャップ

〝人は見た目が九割〟という言葉があるが、松陰といえばこの肖像画があまりにも一般的である。この画から受けるイメージはとても老成し、書物を片手にした学者・教育者然とした姿である。しかし、彼は満29歳の若さで刑死した男である。年齢的にはかなり老けて見える。思想家・教育者として多大な影響を残したことは確かとしても、事実は国法を犯して海外渡航を企て、政府要人の暗殺を企てそそのかした犯罪者・無法者であったのが事実である。そして失敗ばかりの人挫折の男だった。

この画を書いたのは、松下村塾の門下生「**松浦亀太郎**(松洞)」であった。松陰が江戸へ護送される直前に門下生や家族への形見として慌(あわただ)しく複数制作されたという。久坂玄瑞は

尊皇攘夷運動のプロパガンダの小道具としてこの画を利用したという話がある。実像をリアルに描いたのではなく、やや老成した人物に描き尊敬する先生を偶像化したいという気持ちが働いているようである。



この肖像画は実像とは違う、落語家の五代目**円楽**に実は似ていた、というような話もよく聞く。若き日の円楽の写真があった。ちょっと馬面だがイケメンと言えなくもない。松陰の実像と似ているのだろうか。

松陰の写真は無論無いのだが、比較的同時代の人の松陰の姿・形の証言はないかと調べてみた。

徳富蘇峰(1863年生まれ)という希代のジャーナリストが、若き日の1893(明治26)年刊行した『吉田松陰』という本がある。その初版には、松陰の風貌を勝海舟や維新前の故老から聴き取ったという描写があった。

「一個の書生を見る。鬢髪蓬(びんぱつよもぎ)の如く、瞿(く)(やまいだれあり)骨(こつ)衣に勝えざるが如く、而(しこう)して小倉織の短袴(たんこ)を着く。曰く、これ吉田寅次郎なりと。」これは海舟の言だ。

革命前の故老は、「彼れ短躯、白痘(はくとう)満顔、広額尖頤(せんい)、双眉(そうび)上に釣り、両頬下に殺(そ)ぐ、鼻梁(びりょう)隆起、口角禁束(こうかくきんそく)、細目深瞳(しんとう)、ただ眼睛炯々(けいけい)、火把(たいまつ)の如きを見るのみ。」

要約すれば、顔は満面痘痕(あばた)づら、眉は釣り上り、頬は削げ落ち、顎は尖り、鼻は高く、口はきりりと引き締まり、狐目には燃えるような瞳が輝いていた。枯枝の如く痩せて小柄な男だった、というのが実像に近いようだ。

松浦亀太郎は、先生が貧相でやつれた過激な若い思想家には見られないように工夫して描いたのだろう。上手ではないが、それなりに松陰に似ている。

二つの松陰神社

明治時代の初期、維新の動乱が1877年(明治10)の西南戦争をもってようやく落ち着いた頃には、松陰の姿を知る門下生の多くは既に故人となっていた。久坂、高杉、入江、さらには前原一誠、木戸孝允など。松陰と冬の東北行を共にした宮部鼎蔵も池田屋騒動で斃れていた。松陰の姿に真近に接したことがあったのは、親族を除けば品川弥二郎、伊藤博文、山縣有朋、山田顕義といったところであった。

生前の松陰を師と仰いだ彼らによる松陰偶像化は、肖像画の次は社祠に祀ることであった。今にみる松陰神社の原型は、世田谷では1882(明治15)年、萩では1890(明治23)年に、ささやかなお堂から始まっている。坂本龍馬がそうであったように、知名度も含め決して維新のヒーロー、有名人ではまだなかったはずだ。

松下村塾の門下生達による次なる松陰先生の顕彰は、生前の姿を銅像にすることであった。彼らの内の一人品川弥二郎は、1887(明治20)年松陰の意思を継ぎ、京都に初代の尊攘堂を開設した。品川没後の1900(明治33)年、京都帝大に尊攘堂(現・京都大学文化財総合研究センター内)が出来、そこに維新の志士を顕彰する遺品と共に、松陰の木製座像が安置された。

1902(明治35)年、疋田雪洲という作家の作品だ。この松陰像は、生前の姿をよく伝えているとされるが通常非公開のようだ。若き日の円楽師匠に似ていると言えなくもない。

萩と世田谷の両松陰神社に本格的な社殿が整えられるようになったのは、日露戦争後の明治40年代のことだ。欧米からの侵略危機を乗り越え束の間の成功感のあった時代故か、明治から大正期にかけて、松陰の銅像は造られていない。

戦前の松陰像

品川弥二郎は、長府にも尊攘堂を建てたいとの遺志を伝えていたが、1933(昭和8)年に長門尊攘堂(現 長府博物館内)として実現した。堂中の正面中央には、品川弥二郎の像と並び松陰坐像があるという。写真によれば、京都の像と同様やや老成しているが実像に近い面貌である。この時はまだ偶像化が始まっていないようである。しかしその後、松陰の偶像化は彼の精神、思想、行動を持ち上げる方向に向かって行った。明治以降の改革をリードした男達は、松陰を尊皇攘夷の先覚者として利用した。曰く、尊皇愛国者、至誠の人、維新の志士を育てた教育者、更には征韓論のさきがけのような、海外への領土拡張の主張があり、木戸孝允、山形有朋達に影響を与えた。

天皇制下での対外侵略意識は、アジアへの膨張を国策とした軍国主義者に多く共有されたもののようである。日清・日露の束の間の戦勝に浮かれた軍人達の言動には、神宮皇后の三韓征伐とか、秀吉による朝鮮征伐などを正当化、美化することもあったようだ。その正統化に松陰は利用されたのだった。

松陰は、忠君愛国の教育者として昭和に入ってから多いに修身教育等に利用された。これに感化された軍国少年少女が多く生まれ、銅像まで生まれたのである。

東京日本橋に近い**箱崎町公園**の片隅に、忘れられたように銅像がある。意外にもこれが松陰の銅像の最初で、1938(昭和13)年元々旧箱崎尋常小学校校庭に建てられたものだ。

この像には逸話が残されている。当時小学6年生の少女の遺言で建てられたものという。彼女は松陰先生を慕う熱烈なファンであった。病の床から、死後自分の貯金で銅像を建てて欲しいと遺言を残した。これが美談として喧伝され、寄付金も集まり建立が実現したようだ。台座の揮毫は海軍大将の高橋三吉なのが時代だろうか。

肖像画の像との違いは、左手に本を持っていることだが、顔貌はやはり老成している。痩せておらず、実像とは眼・頬・顎など似ていない。教育者、学者然とした雰囲気がある。

弘前への旅のついでに「松陰堂」を尋ねたことがあった。予約がないと中を見学できないことをウッカリ忘れ、外からしか見られないという失敗となった。その折に近くの古書店を覗いてみたら、昭和18(1943)年発行の『松下村塾の人々』なる本があったので思わず買求めてしまった。著者は山中峯太郎といい、陸軍大学出の人物である。あの『敵中横断三百里』の作者だ。本の内容は、松陰そのものより彼の門弟達の活躍に焦点があった。

「吉田松陰の触るるもの皆燃ゆる炬火の如き忠君愛国の熱情、尊皇攘夷の赤誠が、直ちに塾生達の魂を打ち……」と、如何に松陰が幕末・維新を動かす原動力となったかを熱弁している。まさに戦時下発行の本であった。

戦時下の1942(昭和17)年、伊豆下田に松陰の巨大な石像が建てられている。松陰とその弟子・金子重輔が米国への渡航を企てペリーの軍艦に乗り込もうとした事件を題材にしたものだろう。事件現場に近い**柿崎三島神社境内**にある。大きな刀を杖に遠くを見据え、その表情も武張って雄々しくたくましい。しかし、実像からはかけ離れ偶像化されている。題字の揮毫はかの戦前の右翼の大物・頭山満だ。まさに時代を象徴しており、建てたのは賀茂郡教育会。まさに軍国主義の象徴だ。外夷米国を倒さんばかりの勢いだ。

この像は戦後になって、胸部から上が落下したことがあったようだ。松陰の名前は軍国主義の先導者として非難され、その存在も忘れられかけたという。文字通り偶像は地に落ちたのだった。

松陰像の復権

忘れられかけた松陰の名前が戦後再び登場したのは、長州出身の歴史学者・奈良本辰也の『吉田松陰』(1951年)であるという。この本では、「幕末という歴史的条件の中で生き抜いた人間としての松陰、たんなる教育者、思想家としてではない、時代の激流に苦闘し対決した政治的実践者としての松陰像から再出発した」とされている。過渡的な革命家と位置づけられ、一途な性質のヒューマニストとしての側面を評価したのだ。

こうした時代の変化もあったのか、1958(昭和33)年**世田谷松陰神社**に松陰の座像が建てられた。今は社殿とミニ松下村塾の脇に目立たないように存在している。その姿は左手に本を持ち、面長でやはり老成している。垂れ気味の眼が特徴的で、肖像画の松陰とはかけ離れている。その後新しい松陰像が出来てからも撤去はされていない。見捨てられた不遇の像なのかも。

高度成長期の昭和40年代に入ると、東北では「みちのく松陰道」の整備が始まり、記念碑も各地に建てられるようになった。宮部鼎蔵との東北の偵察行の旅に因んだものである。私は秋田・青森県境の矢立峠で彼の漢詩碑に遭遇したこともある。

松陰の生誕地・**萩郊外の団子岩には生家跡**があり、杉家一族の墓もある。この地を図書館・歴史の会の研修旅行で昨年訪れたが、萩の城下と日本海を見渡せる景勝地となっていた。
この一画に松陰の銅像が建っているのだが、弟子の金子重輔を従えた立像で二人像である。伊豆下田での密航企ての旅の場面か？。大きな像で下からはよくその顔が判らなかったが、端正で年よりは老けてみえる。刀は二本差しで、

手に本は持っていない。座像から立像へ、より行動的な姿に変化している。
この像は1968(昭和43)年に建てられた。明治100年記念事業の流れという。

金子重輔との二人像というのがもう一基、実はある。事件の現場となった**伊豆下田**にある。あの一度地に落ちた石像がある柿崎三島神社の近く、弁天島公園のそれである。黒船密航企ての地の説明書きがあり「踏海の朝」と題されている。この像では、遠く海の向こうを指差しており、若くより端正な姿カタチである。この像は松陰の姿をリアルに描くのではなく、進取の気性に富み単純な攘夷主義者ではない情熱的な行動家の姿を描いたもののようである。この松陰像にも、偶像化の時代の変化が見て取れるようである。像の完成は1991(平成3)年、こちらは折からの「ふるさと創生事業」を利用したものだ。地域振興策として各地に1億円をバラまいたあのお金の使い途だった。下田には、松陰に関する事件前後の旧跡が本当に多い。本人にしてみれば、惨めに挫折した事件の現場だから、あまり触れられなくないと思うのだが、観光地化の企てには勝てないようだ。ここにも利用された松陰がいる。

防府・萩への研修旅行では行程の都合上、行きそびれたが萩の郊外にも松陰像がある。**萩往還・道の駅**に松陰記念館と共に長州藩・維新の志士の群像があると聞いた。松陰一人の像ではなく、あまり名が知られていない人物もいるが10体の像である。高杉晋作と久坂玄瑞を従え、真ん中で指差す姿が松陰である。だがやはり老けてみえる。
松陰の生誕160年記念事業の一環として建てられたという。
場所からして観光誘致目的なのだろう。

松陰は行動する人で、実によく旅をしている。北は津軽から南は島原半島・長崎までその歩行距離には驚異的なものがある。歩く姿を像にしたものが、萩高校に所蔵され校長室にあるらしいが、どんな大きさなのか分からない。残念だが、誰でも見られるようなものではないのだ。萩出身の彫刻家・長嶺武四郎の作品とあるが、端正な姿カタチに変わりはない。

立ち姿の銅像は、**京都造形芸術大学**の瓜生山キャンパスにもあるようだ。建てたのは大学の創設者である徳山詳直だという。この人は、奈良本辰也の『吉田松陰』に感銘を受け、松陰の生き方を生涯の範にしたという。〝芸術立国〟をスローガンに1991(平成3)年、北白川にキャンパスを開設したとあるので、松陰の立像も恐らくそのあたりではないか？
隠岐島の出身で若き日に、政治活動で獄中生活も体験したとあるので、松陰の生き様に感ずるところが多いにあったと思えるのだ。

世田谷松陰神社の松陰像

全国各地にある数ある松陰の銅像で、最も新しく造られた座像が世田谷松陰神社の参道脇にある。2013(平成25)年に完成したものである。実物を現地で昨年拝見する機会があったが、穏やかな表情にピシッと背筋をのばした姿は、まさに松陰先生であった。他の像と異なるのは、刀を差しておらず本も左手に持っている。いかにも理知的な教育者、思想家といった趣きがあり、肖像画とはかなり違っているである。

像の造られた経緯を、神社発行の資料に確かめてみれば、こうであった。

「大熊氏広作(鋳造:平成25 ブロンズ)明治23年に大熊氏広氏によって製作された吉田松陰先生像(石膏 松陰神社所蔵)から鋳造されたブロンズ像。もとの石膏像は品川弥二郎等の助言を受け数度の改作の後、松陰先生親族等の満足を得るに至り完成したと伝えられています。当時銅像の建設を模索しましたがたが叶いませんでした。松陰神社ご鎮座130周年(平成24年)の記念事業として東京藝術大学に依頼し、ほぼ1年をかけ石膏像の調査修復及びブロンズ像の鋳造をおこないました。平成25年4月完成。同27日の春季例大祭にあわせ完成除幕式が行なわれ境内に安置されました。」

この説明文には、どこか釈然としないものが残った。明治23年に既に松陰像が出来ていたのだ。しかし銅像として完成したのは平成25年だ。とすると完成迄120年以上かかったということになる。もとの石膏像は神社所蔵とあるがどこにあるのか？　品川弥二郎はどんな助言をしたのか？ また、幾度かの改作がされ、親族は満足し当時完成したというが本当か？ 本当ならどうして鋳造に至らなかったのか？ 建設できなかったのは何故か？ 資金不足なのか、松陰の弟子たちは高位高官に出世していたはずだが、そこにはどんな事情があったのか？

彫刻家・大熊氏広

この謎を解くために、まずもとの石膏像の作者のことを考えてみたい。ひょっとしたら作者の意思と、制作に助言をした品川弥二郎や松陰の親族との間にかなりの意見の相違があったのではなかろうか？ と思われたからである。
制作者の大熊氏広という彫刻家について、前記の神社資料にはこう書かれている。

「安政3年(1856)～昭和9年(1934) 工部美術学校に入学し、教授として来日していたイタリア人彫刻家ラグーザに師事、明治15年首席で卒業。明治21～22年渡欧しファルギエール、モンテベルデ等に師事。日本近代彫刻の先駆者。作品として靖国神社の「大村益次郎」、東京国立博物館表慶館の「ライオン像」などが有名。」(原文ママ)

大熊は、明治時代の彫刻家としては今でこそ知名度は低いが、この時代にあって新進気鋭の優れた彫刻家であり事実、皇族・政治家・軍人・実業家など数多く手掛けている。

大熊は、埼玉県鳩ヶ谷の出身である。郷土の偉人として地元では尊敬されていて『大熊氏広作品集』(昭和11年)が郷土資料館に保存されている。大村益次郎の巨大な銅像は、渡欧前の明治18年の制作であるが、留学から帰国してからの彼は、西洋から学んだリアリズムの作風で知られる。松陰神社から制作依頼を受けた明治23(1890)年といえば、まさに帰国の翌年であり制作意欲に溢れていた頃だと思われる。その彼の作品が、いったんは合意を得たはずなのにも関わらずお蔵入りになったのはどうしてなのか？

お蔵入りなった元の石膏像が、どんな彫刻だったのかを確かめたくなっていた。
前記の作品集にあるいは姿があるかと思い、調べてみたが松陰像の写真はなく、作品一覧に吉田松陰という文字が小さく書かれていただけであった。未完の作品という扱いかも知れない。

不都合な松陰坐像

「歴史の会」の日帰り研修旅行で、都内にある「花燃ゆ」にゆかりの地をバスで訪れる機会があった。松陰が処刑された南千住・小塚原「回向院」、楫取美和子の姉・寿の墓がある青山霊園、そして世田谷松陰神社と回った。台風が接近中で、時折雨模様の不安定な天候で難儀させられた。神社では神職の方から案内と丁寧な説明を伺うことができたが、その直後から大雨となり已む無くその後の行程を取り止めた。近くの豪徳寺の井伊直弼の墓も訪れたかったのだが、彼の無念の涙雨だったのかも。私はこの機会に神社にある松陰の銅像を確かめて見たかった。参道脇の新しい像と、社殿脇の古い像は確認できたのだが、他にあるはずの像が見つからずあせっていた。だが、神社の参拝が終わり社務所へ挨拶に行った時のことだった。玄関を入ると左手に石膏像のようなものがあった。ひょっとしたらこれが、と思い写真を撮りたかったのだが、すぐ神職の方が現れたので機会を逸してしまった。用も無いのに社務所に再度入り、写真を撮るまでの度胸はなかった。しかし、チラリと見かけた古ぼけた像のことが気になって仕方がなかった。
〝何処かで見たことがある！〟と。

松陰に関した本や資料を探してみたが、この像の写真が見つからないままであった。
ところが、意外なところでこの像の写真を見つけることができた。この年の「歴史の会」で「花燃ゆ」を勉強するテキストは『吉田松陰とその家族』(一坂太郎著)であった。その〝はじめに〟の2ページ目にくだんの写真があったのだ。この写真は既に見ていて、意識の何処かにメモリーされていたのだが忘れられていたのだ。だから〝何処かで見たはず〟だったのだ。

吉田松陰坐像（松陰神社（東京都世田谷区）蔵）

あらためてこの写真を眺めてみれば、この神社にある他の像とはまるで異なっているのが明らかだった。著者はこう書いている。
「……一体だけギラギラした雰囲気を醸し出す像がある。それは端坐しているものの、凄(すさ)まじい憤怒の形相で正面を睨みつけ、髪は逆立つ。見るものを圧倒せずにはおかない迫力がある。この松陰像は明治のころ、彫刻家が作った銅像の試作品のようであるが、結局採

用されなかったらしい。松陰をあるイメージで祭り上げようとする人々にとって、それはあまりにも規格外れだったのではないだろうか。……」

著者の方はやはり見抜いておられたのだ。大熊氏広はあまりにもリアルに、松陰像を制作しようとして受け入れられなかったのだということを。

かの東洲斎写楽の浮世絵版画が「あまり真を画かんとてあらぬさまにかきなさせし故、長く世に行はれず」として忘れられたように。大熊氏広作の石膏像は、品川弥二郎や松陰の親族達の意に染まず、お蔵入りとなったのだ、と確信した。

西洋的なリアリズムを目指した大熊は、松陰の人間像を外形だけでなく、その内面や性格まで探ろうとしたのであろう。彼は生前の松陰を知る人たちから取材し、創作の工夫をしたに違いない。松陰の生の人間像を探ってみれば、次のようなものであろうか？

「…一方彼の個人的な習性は、だらしないとさえいってよかった。衣服はぼろぼろであったし、食事や洗面のときには、袖で手をふいた。頭髪は二か月に一回程度しか結わなかったので、見苦しいことがしばしばあった」これは、『宝島』で知られるイギリスの文豪のR・L・スティーブンソンの『YOSHIDA－TORAJIRO』の一節にあり、松下村塾の塾生であった正木退蔵からの聞き書きだという。1878年の夏に2人は英国のエジンバラで出会っていたようで、スティーブンソンはそれをもとに、1882年に本にしたという。あの徳富蘇峰による伝記の11年も前のことであり、世界初の松陰伝らしい。ここでの松陰の様子は蘇峰のそれとよく似かよっている。

さらに、その性格・行動の描写を蘇峰の書から、少し抜き書きしてみれば、

「彼は天成の鼓吹者なり、感激者なり。彼は弾丸の如し、ただ直進するのみ。彼は火薬の如し、自ら焚(や)いて而(しこう)してものを焚(や)く。彼が一生は、教唆者に非ず、率先者なり。夢想者に非ず、実行者なり。」とある。

松陰は自ら〝二十一回猛士〟と号し、〝狂夫の言〟を吐きながら、挫折を繰り返した小柄で華奢でなりふり構わない激情の人であった。 大熊の石膏像は、そんな松陰の人格の一面を実によく表現していると思う。

リアルな彫刻は、松陰を師と仰ぎ神と奉らんとする品川弥二郎のような人には、とうてい受け容れられないものだったのであろう。「家族における彼を見れば、あたかも天人を見るが如きの想いあり。彼はその全心を捧げて父母を愛せり、兄妹を愛せり、…」とあるように、家族からも、大熊の石膏像は受け容れられなかったはずだ。しかし彫刻家として、妥協して改作の要求に応ずることはしなかったのである。お蔵入り止む無しとなった。

創作意欲に燃えた新進彫刻家の青春の蹉跌であった、と想像するが如何であろうか。

そこから120年以上の時を経て完成した坐像は確かに、神社にとってあるべき松陰像を創り上げたものだろう。だがしかし、当初の石膏像とは似ても似つかないものとなった。大熊氏広作と称してよいものか？ 何故に120年も前の大熊の石膏像のことを、ことさら持ち出したのだろう。そもそも彼の名前が必要だったのか？ 東京藝術大学制作で良いのでは無いのか？ 共に芸術家である大熊氏広と東京藝術大学の方々、どちらにも失礼に当た

らないのか？ 石膏像を公開出来ない何か事情が他にあるのであろうか。この間の経緯を記録した資料が不明・不詳であるのが残念だ。この像が公開され、普通に拝見できる日は来ないのだろうか。

先のスティーブンソンの叙述には、こんなところもあるようだ。

「しかし同時代の人に対しては、その人が英雄としての特徴を持っていても、口論し、泥に汚れた衣服を着た、風変わりな先生の中に、決して英雄らしさを認めようとはしないものである。やがて年月を経るにつれ、ヨシダの門下生たちは、理論的に純粋な人物たちの周りに探してみても無駄なことを知った。ヨシダの教えの意味をますます深く理解し始めると、彼らはこの滑稽な先生を、人間として最も高潔な人物として敬慕するようになったのである。」(よしだみどり訳)

彼の言葉は至言だ。明治15年松陰神社創建の年に松陰像の変遷を予言しているかのようである。松陰を想う人々の思いが、様々な偶像を生んでいったのだ。　(了)

参考資料

書籍:

『吉田松陰』徳富蘇峰著/岩波書店/1981年刊(1893年初版)

『松下村塾の人々 』山中峯太郎著/潮文閣 /1933年刊

『大熊氏広作品集』/鳩ヶ谷市立郷土資料館/1936年刊

『吉田松陰 』奈良本辰也著/岩波書店/1951年刊

『吉田松陰 留魂錄』古川薫 訳/徳間書店/1990年刊

『吉田松陰 』田中彰著/中央公論社/2001年刊

『明治維新と征韓論』吉野誠著/明石書店/2002年刊

『知られざる「吉田松陰伝」』よしだみどり著/祥伝社/2009年刊

『吉田松陰と旅』海原 徹著/ 社団法人 萩ものがたり/20012年刊

『吉田松陰とその家族』一坂太郎著/中央公論社/2014年刊

『吉田松陰 』桐原健真著/筑摩書房/2014年刊

Webサイト

「世田谷松陰神社」、「京都造形芸術大学」、「長府雑記帳」「下田市観光協会」他多数。